志麻の体に奴隷の証としてピアスが装着された。綾子夫人と同じように両乳首とクリトリスの根元に計３個の金属のリングが貫通したのだ。そして綾子夫人には刺青が施された。タトゥーショップで入れられた刺青は、志麻のように人目につきにくい箇所ではない。綾子の下腹部に彫られたのだ。「牝奴隷　綾子」の文字がくっきりと彫られた。

志麻の体はピアスを入れる以前と比べて格段に敏感になった。乳首を貫通したリングの存在を常に感じる。志麻の動きに合わせてリングは淫らな刺激を残酷なほどに与えてくる。リングのうごめきによって乳首に常時、淫熱が宿る。志麻は施術後ずっと乳首をうずかせていた。乳首よりもさらに疼くのはクリトリスだった。意識しないではおれないのだ。志麻の動きに合わせてクリトリスを貫通したリングは、女体の一番敏感な器官を深層から揺さぶってくる。志麻は日常的な動作でさえも性的に興奮し、登りつめそうになっていた。

そんな志麻のクリトリスリングにチェーンが装着され、楓太は町中を歩かせる羞恥責めを行うようになった。ノーパンノーブラである。チェーンを引かれると、志麻は従うしかない。女性の一番敏感なところにつながっているのだから、楓太に操られるがままに歩くことしかできないのだ。スカートの裾から伸びたチェーンの存在を通行人たちに見られながら歩く志麻は激しい羞恥に襲われた。

「恥ずかしくてたまらないわ」

志麻の呼吸が乱れ、美しい顔は恥じらいの色に染まる。町中での羞恥責めの最中でも逝きそうになってしまう。目鼻立ちの整った美しい顔は、恥じらいながらも性的な高ぶりで上気している。クリトリスへの刺激、乳首を貫通したリングがもたらす淫熱、衆人観衆を前にノーパンノーブラで歩く羞恥、さらにスカートの裾から伸びるチェーンに引か

れて惨めな姿をさらす恥辱感が渦巻いて、それらは志麻を呑み込み翻弄する被虐の波となっていく。
「嶋井君」
呼びかけられた楓太は立ち止まった。若い女性の二人連れだ。
「春山と西田じゃねえか。」
「久しぶりね。嶋井君は城南大学でしょ？」
「ああ、三流大学の不良学生さ」
話しかけてきたのは、春山千帆と西田香奈という若い女性だ。
「春山と西田は？」
「私たち、看護学校に通っているのよ」
千帆と香奈の視線が、志麻に注がれる。志麻のブラウスから乳房がうっすらと透けて見えることに驚きの色を浮かべる。そして楓太が手にしているチェーンがスカートの裾から中につながっていることに気づき、怪訝な表情となるのだ。
「水森春樹の母親さ」
楓太がチェーンをつんつんと軽く引いた。それだけで志麻の腰はくだけそうになる。その腰を楓太は片手で抱き寄せる。肉体関係が存在する男女の雰囲気がにじみ出る。
「水森君のお母様？」
「水森君のお母さんと･･･？」
春山千帆と西田香奈の視線は、腰を抱かれている志麻の顔に向けられ、まじまじと見つめる。
「きれいな人･･･」
千帆はそうつぶやき、ノーブラの胸に視線を移した。乳首の突起が浮き出ているブラウスだ。張りのある乳房の輪郭もうっすらとではあるが透けて見える。
「水森君のお母様とどういう関係なの？嶋井君」

香奈は、楓太の腰に回した手が美熟女の臀部に下がり、スカートの上から露骨に撫でている仕草を見る。そしてもう片方の手で握っているチェーンがスカートの裾から中につながっていることをもう一度確認した。ただならぬ男女の仲である気配を感じる。嶋井楓太と水森春樹は友人だった。その友人の母親の尻を隠す風でもなく露骨に撫でているのだ。臀部を撫でられる春樹の母親はひどく恥ずかしそうで、ずっとうつむいている。千帆がつぶやいたとおり、目鼻立ちのすこぶる整った美人だ。抜けるように白い肌とうらやましいほどすてきなスタイルの持ち主だ。大学生の息子を持つ母親だとは到底思えない。
「春樹のママさんとは男と女の関係･･･いや、ご主人様と奴隷の関係さ」
楓太の言葉に、香奈と千帆は驚きの色を増していく。
「奴隷？」
「サドマゾね。ＳＭプレイをしているのね」
千帆はうつむく春樹の母親の顔をのぞき込むようにしてもう一度見つめる。
「ＳＭプレイって？」
香奈も興味を持ったようだ。
「春樹のママさんは、いじめられるのが好きなマゾ女なのさ。」
「こんなきれいな人が？」
香奈がマゾ女だと言われた美熟女の顔を露骨にのぞき込む。
「そのチェーンは？」
千帆はスカートの中に消えているチェーンを指さした。
「マゾ女の散歩用につけているリードだよ。犬の散歩には必需品だろ」
「友達の母親を犬扱いしているなんてひどいわね･･･」

香奈は楓太を責める言葉を発したが、表情はそうでもない。
「ご主人様に奉仕することに悦びを感じる牝犬なのさ。ＳＭプレイ、見せてやろうか」
「それはだめ･･･」
春樹の母親がはじめて口を開いた。澄んだきれいな声だ。
「志麻、ご主人様の命令だぜ」
楓太の腕が友人の母親の体を強く引き寄せる。
「･･･つらすぎます･･･」
同性として嫉妬するほどの魅力的な四肢の持ち主である美熟女は、いやいやと首を左右に振る。
「牝奴隷のくせにご主人様の命令に逆らうのかい？」
楓太の手が抱き寄せた志麻の髪をかき分け、首筋をさらした。香奈も千帆もそこに彫られた卑猥な文字に視線は釘付けとなった。「牝奴隷　志麻」の文字が白い肌にくっきりと刻まれている。
「すごい！」
「本物の奴隷だわ」
香奈と千帆は素直な感想を発したが、同時に友人の美しい母親を奴隷扱いしているアブノーマルな事実がもたらす衝撃はおさまらない。刺青まで入れさせている間柄なのだ。それもただの刺青ではない。「牝奴隷　志麻」という奴隷の証となる刺青を肌に刻んでいるのだ。
「ここで裸に剥いてやろうか？牝奴隷　志麻よ」
楓太の指が、志麻のうなじに彫られた刺青を撫でる。いやいやと首を左右に振っていた志麻は、観念したかのようにうつむき、
「･･･わかりました」
と哀しい声を出した。
　そんな志麻の耳元で楓太がささやきかける。顔を上げた志麻は、

「息子の友人の牝奴隷となっている水森志麻の恥ずかしい姿をどうぞ見てください」
とつぶらな瞳に涙をにじませながら香奈と千帆に向かって言うのだった。